

不登校の子供を学校に行かせようとするに関する考察

藤 中 隆 久*

A discussion on trying to make school-phobic child to go to school

Takahisa FUJINAKA

【問題と目的】

全国的に不登校者の増加が止まらない。特に、この5年はすさまじい勢いで増加している。各地の教育委員会も対策を立てたり、また、各学校で独自の取り組みを試みたりはしているが、増加の勢いは止まりそうにない。

一方で、教育機会確保法（2017）では、学校復帰だけを目的とせず、「児童生徒の学習する権利」の保障に視野を広げるようになっていくし、文部科学省は生徒指導提要（2022）において、『学校に登校する』という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的にとらえ、と述べており、近年は登校させることを、それほど強い目的とはしなくなってきている。不登校児童生徒は、必ずしも登校させなければいけないとは考えなくてよい状況になってきているのである。

このような状況の中で、現場の教諭たちは、葛藤している。不登校のこの急激な増加を何とかしたいし、そのためには再登校を促したいという思いも強いのだが、一方で、近年の文科省の不登校対応への理念に対しての理解もできるので、教師としてどのような行動をとるべきなのか明確な指針を持ってなくて、葛藤し混乱しているのである。教師ならば、不登校の児童生徒に登校させたいと思う気持ちは、当然といってもよいであろう。生徒指導提要にも不登校をすることで、「学業の遅れや進路選択上の不利益、社会的自立へのリスクが存在する」と述べられている以上、児童生徒のそのようなリスクは取り除いておいてやりたいと教師ならば考えるのである。一方で、必ずしも再登校を勧めなくてもいいという理念は理解できなくもない、しかし、不登校には多くのリスクがあるのだから、それを見過ごすこともできない、しかし、再登校を促さなくてもいいというのも理解できる、,,,、と考えはじめると教師は葛藤と混乱のループに陥るのである。つまり、教師は以下の三つのテーゼの整合性について葛藤している

ということもできるだろう。

- ①「今の不登校の激増を何とかしたい」
- ②「また、不登校は、学業の遅れ、進路選択や社会的自立に不利益となる等のリスクが高くなる。教師としては、将来のリスクになるとわかっているのに、それを放置しておくわけにはいかない気になる」
- ③「しかし、不登校児童生徒は、必ずしも登校させなければいけないとは考えなくてよい」

この三つのテーゼは、一つ一つを見るとどれも間違っていないのだが、それを全部成り立たせようとすれば、どれかが成り立たなくなるのである。しかし、そもそも教育実践とは、一つ一つが間違っていないように見えるテーゼを全部成り立たせようとすると、成り立たなくなるが、それでも、それらを全部成り立たせようとする試みそのものということができるのではないだろうか。その試みが何らかの成果を上げるためには、矛盾するテーゼを統合できる仮説が必要だと思われる。本稿では、不登校問題に長年関わってきた筆者が、近年の不登校に関する統計結果をもとに、これらのテーゼをすべて成り立たせる仮説を提出することを目的とする。

【第一のテーゼ】

まず、第一のテーゼの「今の不登校の激増を何とかしたい」という教師の思いをどう実現させるかの仮説である。

文部科学省の統計によると、小学校、中学校の不登校の総数は、平成25年度は119617人、令和元年度では181272人、令和4年度では299048人である。この10年、この5年の増加は確かにどうにかしないとイケないレベルであると筆者にも感じられる。では、どうすればいいのだろうか。

文部科学省の令和4年度の統計によれば、小中学校で不登校が登校できるようになった割合は27.2%である。この数値は毎年ほとんど変化がない。この数値は、低いと判断してよいだろう。そして、「再登校」とカウントされている児童・生徒の中には、別

* 熊本大学教育学部

室登校や、適応指導教室や、民間のフリースクールや、最近では、自宅でのオンライン授業参加などかなりの割合で含まれている。不登校の激増を止める一つの方法としては、この別室、適応指導教室、オンラインなどを増やし、それらを登校とカウントすることである。しかし、多くの教師が望む「登校」とは、自分の学級に毎日登校する形態であろうが、そのような形態のみを「登校」とカウントすれば、27.2%という数字はさらに下がるはずである。つまり、多くの教師が望んでいる形態であるところの不登校の子どもの教室への完全復帰は、かなり困難であるといってもよいのである。そうであるならば、困難なことにエネルギーを使っても現在の激増を食い止めることはできないし、エネルギーを使う教師も疲労するだけであろう。では、どう考えればいいのか。

現在の不登校の激増を止めるための方略として、不登校になった子を、再登校させることにエネルギーを使うよりも、もっと、本質的で効率的なエネルギーの使い方があると筆者は考えている。それは、不登校になった子どもを学校に戻すことではなくて、不登校になる子を減らすことである。いくら、不登校の子どもを学校に戻そうとしても、そもそもそれほどの数が戻るわけではない。一方で、不登校の子どもは次々と出現する。ならば、現在出現し続けている不登校を出現しないようにすると考える方が不登校の数を減らすためには効率的ではないだろうか。しかし、どうやって不登校の出現を減少させるのだろうか。そのためには、なぜ、不登校になるのかを考える必要がある。

令和4年度の文部科学省の統計によれば、不登校の要因として最も多いのが、小学校で「無気力、不安」が50.9%、中学校でもやはり「無気力、不安」で52.2%なのである。小学校と中学校に共通する不登校の要因の半数以上は「無気力、不安」なのである。しかし、「無気力、不安」が不登校の要因という考え方は、おかしいと筆者には感じられる。

ある子どもが何の原因もなく突如として「無気力、不安」になり、それが原因で不登校になるのではなく、まずはなんらかの原因があって、そのせいでだんだんと「無気力、不安」となってゆき、その「無気力、不安」がやがては不登校を引き起こし、不登校になった子どもがさらに「無気力、不安」状態に陥るといふ悪循環があるのではないだろうか。教師の目に見える以前から、「無気力、不安」状態が少しずつ進行していて、やがて不登校になっていくという現象なのではないだろうか。とすれば、まずは、学校において何が子どもを無気力、不安にさせる要

因なのかを考えるべきなのである。

しかし、そもそも「無気力、不安」とは何か明確なわかりやすい原因によってなるものなのだろうか。学校生活を送っているうちによくわからないけども、徐々に徐々に「無気力、不安」となってゆくケースの方が圧倒的に多いのではないだろうか。多くの不登校の子どもは、不登校になった明確な理由を答えられない。「なんとなく行きたくない」という答え方をする子は多い。筆者も、このような子に多く出会ってきた。この現象こそが、不登校を解明する上で、非常に重要だと筆者は考えている。令和2年度の文部科学省の不登校児童生徒に対する調査の中で「休みたいと感じ始めてから実際に休み始めるまでの間に、どのようなことがあれば休まなかったと思うか」という問いがあるが、この問いに対する最も多い答えは「特になし」(小学校:55.7%, 中学校:56.8%)なのである。二番目は「友達からの声かけ」だが、これは、小学校で15.1%, 中学校で17.4%である。つまり、不登校にならない方法は、半分以上の子どもがわからないのである。これは、同時に、なぜ不登校になったのかも、明確に答えられないということも意味している。

なぜ、それを明確に答えられないかと言えば、それがあまりにも当たり前に学校に存在するからであろう。当たり前に存在しすぎているので、まさか、それが「無気力、不安、不登校」のループの原点であると想像できないのではないだろうか。では、いったい、学校生活のあたりまえに存在する何が子どもを「無気力、不安」にするのだろうか。それは、学校という場に必然的に存在する「強制力」ではないだろうか。

筆者は、学校に強制は絶対にあるべきだと思っていて、強制力が悪いと言いたいわけではなくて、学校には強制力が存在しているという当たり前の事実を指摘しているだけなのである。

子どもからすれば、毎朝決められた時間に登校することを強制され、机の前に座って静かに授業を受けることを強制され、毎日が時間割通りに進行していくことを強制され、毎日クラスメイト達と自分では選べない献立の給食を食べることを強制され、掃除をすることを強制され、帰りの会を強制され、家に帰ってもみんなと同じ宿題をやることを強制される。しかも、それらをすべて頑張ってやることも強制される。また、学校行事も頻繁にあり、それに参加することも強制される。運動会、遠足、音楽会、文化祭、校外研修、しかも、明るく元気よく友達と協力することも強制される。これらはごく当たり前に学校に存在する。その強制が当然のことだと考え

ているのは教師だけではない。子どもたちもほとんどがそう考えている。なので、この強制力は教師から子どもに向かっているだけではなく、子ども同士でもお互いがお互いに向けあっている。問題は、その強制を苦しいと感じる子どもが一定数はいるということである。そして、あまりに当たり前に強制力が存在するので、それが苦しいと感じている子も、いったい、自分は何を苦しいと感じているのかわかっていないのではないだろうか。

繰り返すが、この強制力は必要ないとは筆者は考えているわけではない。しかし、緩められるものを緩める必要があるとも考えている。では、何を緩めることができるのだろうか。それは、授業と学級経営であろう。子どもは一日のほとんどの時間を授業を受けて過ごす。また、一日のほとんどの時間を学級で過ごす。一日のほとんどの時間を過ごすところが常に苦しければ、「無気力、不安」となる子もいるであろう。なので、楽しい授業と楽しい学級を作る努力を教師がすべきなのである。みんなが楽しく参加できる授業を実施し、みんなが楽に過ごせる学級を作ること、これは、不登校の子どもを再登校させることにエネルギーを使うよりも、ずっと、本質的でありかつ効率的ではないだろうか。みんなが安心して過ごせる学級を作り、みんなが知的な楽しさを感じられるような授業を実施することは教師の本質であり、教師はここにこそエネルギーを使うべきである。これによって学校に存在する苦しさをやわらげ、登校の出現率が下がる、これこそが、近年の不登校の激増の勢いを低下させる考え方ではないだろうか。

【第二のテーゼと第三のテーゼの統合】

不登校の激増を止めるための方略として、不登校の子どもを再登校させることよりも、楽しい授業と楽しい学級づくりの実践により、不登校の出現率を下げることであることを論じた。この考え方は、不登校を再登校させることとは関連しないので、第三のテーゼとは矛盾しない考え方である。なので、現在の矛盾は、第二のテーゼ「不登校は将来のリスクとなるので、リスクを低下させるために再登校をさせたい」と第三のテーゼ「不登校は必ずしも、登校させなくてもいい」の間にだけ存在している状態となっている。この矛盾を統合する仮説とは、いかなるものになるのであろうか。

文部科学省の平成26年（2014）の「不登校に関する実態調査」によると、中学3年時に不登校だった人が20歳になった時点で、非就学・非就業率は

18.1%であった。また、20歳になった時点での大学・短大・高専への進学率は22.8%であった。また、中学卒業後の高校進学率は85.1%であった。これら数字は、不登校は、その後の人生においてかなりの率で回復していることを示しているとみてよいのではないだろうか。20歳時点で、非就学・非就職が18.1%は、不登校を経験していない人と比較すれば高いのかもしれないが、それでも、そもそも、中学3年時点で不登校生徒だった人の80%以上は、進学か就職をしているのである。つまり、不登校は将来の大きなリスクになるとまでは言えないと解釈してもいい数字であると筆者には感じられる。不登校はそこまで恐れるほどのリスクとはなりえないのではないだろうか。なので、第二のテーゼの「将来のリスクになるので、不登校状態を放置できない」は、そもそも、あまり成り立たないのではないだろうか。もちろん、不登校がノーリスクというつもりはない。しかし、この数字からは、それほど高いリスクともいえない。教育活動をするうえで、様々なリスクは当然ある。不登校だけを特別リスクが高い要因と考えて、そのリスク低減のために再登校をさせようとする考えの方に、むしろ、もっとリスクを高める要因が潜んでいるとさえ思われる。

同じ追跡調査の中で、中学3年時の支援ニーズ、中学卒業後の支援ニーズの調査があるが、中学3年時の支援ニーズで一番多いものが「なし」（37.1%）、卒業後の支援ニーズについても一番多いものは「特になし」（35.3%）なのである。つまり、不登校をしていた時を振りかえって考えた場合、「支援は必要ない」と考えている元不登校児が最も多いのである。あるいは、文部科学省の令和2年度の調査によると、「学校に戻りやすいと思う対応」について、最も多い回答が「特になし」である。（小学校：57.1%、中学校：54.4%）次に多いのは小学校中学校とも「友達からの声かけ」だが、他の選択肢よりは多少高いというだけで、小学校、中学校ともに高いとはいいがたい。むしろ低いといってもよい。（小学校：17.1%、中学校：20.7%）。「先生の家訪問」はさらに低い（小学校：4.2%、中学校：6.2%）「先生とインターネットや電話で話すこと」は、さらに低くなる（小学校：4.1%、中学校：3.5%）これらの数字から、不登校児童・生徒がどのように感じているのかを読み取れるだろう。

つまり、支援や声かけを望んでいない不登校児童・生徒は多いということである。支援の中でも特に先生の支援は望んでいない子が多いのである。現在不登校の子どもも、過去不登校だった人が不登校時代を振り返ってみても、支援ニーズは特になくないと考え

ている不登校や元不登校は多いのである。「ほっといてほしい」と感じている人が多いといってもよい。

「かまわないでほしい、ほっといてほしい」と感じている不登校が多いならば、第三のテーゼ（必ずしも登校させなければいけないと考えなくてもいい）の考え方には妥当性がある。かまわないでほしいと考えている不登校児童生徒に再登校をさせようとすることは、本人からすれば苦痛以外の何物でもないし、それで、仮に再登校したところで、その後がうまくいくとは思えない。筆者もこの考え方に賛同する。多くの不登校児童・生徒から、「ほっといてほしい」という言葉を筆者はよく聞かされたし、これは、彼らの本音なのだろう。だから、基本的には登校させようとしないう方がいいと思われる。

不登校をしても、実はそれほど将来のリスクは高くないし、多くの不登校児童・生徒は、ほっとかれることを望んでいるのである。なので、ここで採用すべきは第二のテーゼではなく、第三のテーゼといってよいだろう。不登校はそれほど将来のリスクにはならない。多くの不登校はほっといてほしいと感じている。

しかし、不登校はノーリスクかと言えばそうではない。不登校が恐れなければならない事態とは、どのようなものであろうか。

内閣府が「こども・若者意識と生活に関する調査」（令和5年）において、15歳から39歳の引きこもりの調査の報告書を出している。現在の外出状況が、「趣味の用事の時だけ外出する」「近所のコンビニは出かける」「自室からは出るが、家からは出ない」「自室からほとんど出ない」のいずれかであり、かつ、その状態が6か月以上続いている人を、「広義の引きこもり」と定義し、広義の引きこもり状態の人114人に、「あなたの外出状況が現在の状況となった最も大きな理由は何ですか」と尋ねた結果、小学校時代の不登校だと答えた人が1.8%、中学校時代の不登校と答えた人が9.6%いたのである。これは、引きこもりにつながる不登校は、10%程度であるという捉え方ができる。小中学校で不登校をしても、あまり引きこもりにはならないのであり、つまり、リスクは低いということである。しかし、また、引きこもりの理由として小学校、中学校で不登校だった人が10%程度はいるわけで、低いとはいいいがたいのではないだろうか。

つまり、不登校から引きこもりになるリスクは多少あるといえる。不登校は、進行してゆくものである。ならば、不登校は引きこもりにまで進行するリスク要因であるとはいえるであろう。そして、恐れなければならない事態とは、引きこもりになること

であるといってよいだろう。では、どう考えれば引きこもりにまで進行することを防げるのだろうか。

多くの教師が、不登校の児童・生徒の家庭訪問を行う。家庭訪問にも良い家庭訪問と悪い家庭訪問がある。悪い家庭訪問が、不登校を引きこもりにまで進行させる要因になる可能性はあると筆者は考えている。悪い家庭訪問とは、登校させようとする家庭訪問である。不登校児童生徒のニーズとして、「先生の家庭訪問」はかなり低い。それは悪い家庭訪問を先生がしているからである。登校させようとする教師は、近年の不登校の激増に歯止めをかけたいとか、あるいは、将来のリスクを取り除くために登校をさせたいと考えているのであろう。しかし、ここまで述べて来たように、不登校の激増を緩めるための方略としては、不登校を再登校させることが最適解とは言えないだろうし、また、不登校はそもそも将来のリスクにはそれほどならないので、再登校をさせようと考えなくてもよいのである。恐れるべきは引きこもりにまで進行することである。教師としては、家庭訪問が引きこもりへの進行を促進することを恐れるべきなのである。

不登校は、「深まる、広がる」という進行の仕方をする。「深まる」とは「イヤ」の程度が深くなってゆくことである。学校が何となくイヤ→学校がイヤ→学校がかなりイヤ→学校が絶対にイヤ。ここまで深まれば、学校に行かせる方法は思いつけない。ここまで深まってもいろいろな要因が複雑に絡まりあって再登校できるケースもあるだろうが、それを人為的に起こすことは不可能だと思われる。

「広がる」とは「イヤ」の対象が広がってゆくことである。学校がイヤ→先生がイヤ→学校の友達がイヤ→他人全般がイヤ→家族がイヤ。ここまで行けば、引きこもりである。この矢印の進行に教師も一役はたしているように思われる。すなわち、この状態の不登校の子どもの家庭に訪問して、登校させようとするとは、「先生がイヤ」の思いをより強くして、矢印を進行させる結果になりやすい。不登校は、ほっといてほしい、かまわないでほしいと思っている子が多い。そのように感じている子どもの家庭を訪問して、登校をさせようとするれば、不登校の子からすれば「先生がイヤ」となり「学校が絶対にイヤ」となる可能性がある。これが悪い家庭訪問である。では、よい家庭訪問とはいかなるものであろうか。それは、楽しい家庭訪問である。不登校の子どもが、「また、先生に来てほしい」と感じるような家庭訪問である。そのような家庭訪問ならば「深まる、広がる」進行の矢印も止められる。家庭訪問は楽しければいいわけではない。楽しくないとだめ

なのである。不登校の家庭訪問において楽しさは、必要十分条件ではなく、必要条件なのである。楽しい家庭訪問をする限りは、家庭訪問によって進行を促進させることはない。「先生がイヤ」「学校がイヤ」の矢印を進めて、引きこもりにまで行きつかせることに、登校の圧力をかける家庭訪問は一役買っている。それは作られたリスクであり、そのリスクこそを教師は恐れるべきである。不登校そのものは、それほど恐れるべきリスクではない。

【まとめ】

不登校の増加を抑えるための方略は、不登校になった子を再登校させることではなくて、授業と学級を楽しい場にして不登校になる子を減らすことである。

また、不登校の子を登校させようとしなくてもいい。なぜなら、不登校のリスクはそれほど高くないからである。また、家庭訪問で不登校に強く登校を促せば、ほっといてほしいと感じている不登校の子は、引きこもりにまで進行するリスクが多少ある。

なので。家庭訪問をする場合は、楽しい家庭訪問にすべきである。

文 献

文部科学省（2023）児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸改題に関する調査 https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/shidou/1267646.htm

文部科学省提要（2022）生徒指導提要（改訂版）：文部科学省（[mext.go.jp](https://www.mext.go.jp)）

文部科学省（2014）「不登校に関する実態調査」～平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書～（概要版）：文部科学省（[mext.go.jp](https://www.mext.go.jp)）

文部科学省（2021）令和2年度不登校児童生徒の実態調査結果の概要 資料2 【概要】不登校児童生徒の実態調査結果（[mext.go.jp](https://www.mext.go.jp)）

内閣府（2023）子ども・若者の意識と生活に関する調査（令和4年度）こども・若者の意識と生活に関する調査（令和4年度） - 内閣府（cao.go.jp）